

天候不順である。小麦の刈り入れ時であるが、コンバインが夜を徹して稼働する状況を見られない。雨にぬれた小麦は刈り入れる訳にはいかず、農家は気を揉んでいるようだ。7月下旬から8月上旬に刈り入れが出来るように品種改良が為されたのだそうだが、今年はその甲斐も虚しくと言うべきか。

さて我々、北海道に勤務する自衛官はいわば現代版屯田兵か。国防という意義は同じでも屯田兵と同じく開墾・拓殖に従事している訳ではないので厳密な意味においては当然のことながら屯田兵ではない。然しながら、道内各地に駐屯し地域と共存共栄するという側面からは屯田兵的と言えなくもない。

私は函館、倶知安そして旭川と勤務したが、屯田兵に縁^{ゆかり}のあったのは旭川市である。同市には、永山町という地名があって、永山兵村^{へいせん}があったところである。

そして今回帯広勤務である。十勝は晩成社と十勝監獄の囚人によって発展してきた（「朔東から第12号」を参照）が、十勝以外の地域には矢張り屯田兵村が置かれて、夫々の地域の発展に多大な貢献をしてきた。朔東域内の屯田兵に付いてその概要を紹介しよう。

● 屯田兵制度の推移

薩摩藩出身の黒田清隆開拓次官は、明治6年(1873)、屯田兵設立建白書を提出した。この建白書によれば、屯田兵設立の目的は、北辺すなわち樺太及び北海道の防衛警備、北海道の開発（拓殖）、明治維新により失業した士族の授産をし得ることであり、この三目的を経済的に達成しうる方策として屯田兵制度が案出されたものである。

翌年には、黒田は開拓次官のまま屯田兵事務総理に任ぜられ、10月には、「屯田兵条例」が制定された。同年中に、石狩国札幌郡琴似村（現札幌市琴似地区）に兵屋200個を新築・準備し、士民198戸男女965人が移住したのを皮切りに、札幌、室蘭、釧路、根室の軍事的要衝と目された地域に陸続と屯田兵村が設置された。明治24年には、条例が改正され、「平民」も受け入れるようになり（平民屯田と言い、これ以前を士族屯田と称する）、所謂三県時代を経て、道庁時代になっても屯田兵の入植が続けられ、最終的には、37兵村、7300戸余り、4万人弱である。人口の増加による徴兵令の実現可能性の増加、土地開発の進捗、交通の発達等更には旭川に明治33年には、北海道健児の母胎と言われた常備第七師団が設置されたこと等により、屯田兵制度の意義が薄くなり、明治36年には廃止された。

屯田兵全般を管理・統括したのは、当初は開拓使内の屯田事務局、開拓使廃止に伴い独立し、陸軍卿に直属、爾後屯田兵本部更には屯田兵司令部と改称された。明治29年5月第七師団の新設に伴い、屯田兵に関わる統括は同師団司令部が実施することとなった。

各兵村は、一個中隊、戸数にして200戸から240戸、住民1千人内外、地積600万坪(二千町歩)程度であった。大村であっただろう。中隊長は陸軍大尉を任じた。2または4個中隊を以て大隊とし、中央より大隊長を派遣した。屯田兵の原籍地は、46都道府県(沖縄県は0である。)に亘るが、その内2000人以上の府県は、石川県、香川県の両県である。

● 管内の屯田兵村管見

管内には7個の兵村が設置されたが、そのうち東及び西和田、北及び南の大田の4個兵村は士族屯田であるが、上・中・下の野付牛の兵村は、所謂平民屯田である。最も古いのは、根室半島の根元、現根室支庁和田地区に明治明治19年、220戸が入植（屯田兵第二大隊第1中隊：和田正苗大隊長の名前に因んで和田村と命名）、次いで同じく和田地区に第二中隊200戸（或いは、220戸）が明治21、22年に入植した。北海道有形文化財に和田屯田兵の被服庫が指定されている。屯田兵関係では残存する唯一の被服庫であり、米国の西部開拓時代の建築様式で、札幌の時計台と同様の形式とのものである。

釧路地方の警備並びに拓殖の期待を一身に背負った宮城・山形・新潟・福井・石川・和歌山・兵庫・山口の8県から440戸、2159人（屯田第4大隊の一部）が現厚岸町大田地区に明治23年に入植し、南・北の両屯田兵村が開かれた。米の出来ない冷涼な気候、畑作に不適な泥炭地など想像を絶する苦勞があり、多くの者が離村したと言われているが、残った者は馬産、養蚕等幾多の産業を興した。大田屯田開拓記念館がある。入館料大人100円の由。

北見市は、昭和17年の市制施行までは、野付牛村と称されていた。明治30年6月及び翌31年には各府県から徴募した屯田兵587戸（ある資料では、397戸）が入地し、第1中隊を端野、第2中隊を野付牛、第3中隊を相内に配置した。道東地区の内陸開拓の拠点が整備され始めたと言えよう。この地方の開拓が、明治20年に着工された旭川から北見を経て網走に至る所謂中央道（現国道39号線）が網走監獄の囚人の過酷な労働によって明治24年に完成したと、屯田兵更には移民団も100戸余り入植したことが拍車をかけたものと思われる。

● 屯田兵の暮らし一般

屯田兵の暮らしや日常は如何なるものであったかは、夫々の資料館等で直に確認して貰ったほうが良いとは思いますが、その一端を紹介した小冊子がある。「北海道防衛史」という北部方面総監部が昭和41年5月に編纂したものである。それから若干引用させて貰う。

『屯田兵は、出発にあたって、支度料、移住費が支給された。予め、土地が選択され道路と家屋、家具が用意され、農具、種子が与えられ到着すると直ぐにも仕事が始められえようになっていた。然し家は大量の急造家屋でとても寒地向きではなかった。勿論板で囲った家であれば寒さが防げるはずもなく、寒い夜等は天井板のない屋根裏一面に霜がおりて釘という釘は総て白銀色に光った。屯田兵村の生活はすべてが軍隊式であった。起床は4時半、間もなく点呼ラツパ、次で診断ラツパが鳴ると班長の戸別点検と家族の健康調査が始まる。主人は集合ラツパと共に軍装に身を固めてかけ足で、練兵場に集合し訓練。家族は開墾に従わねばならなかった。軍装は洋服に厚織木綿のシャツにズボン、薄い外套、これだけで冬期の訓練も強行された。手袋はなく履物は足袋、草軽だった。その足袋は肌がすげえ見える様な薄い木綿だった。従ってボロギレをぐるぐる足に巻いた上に、米俵用のワラで作ったツマゴや靴を穿いて凍傷を防ぐ人も多かった。』

何処かの屯田兵の資料館を訪れて展示品を確認し、説明書きを読んで貰えばよりイメージアップが出来よう。

（参考：復刻版 北海道屯田制度 上原轍三郎著、北海道史第3巻 通説二 北海道廳 北海道防衛史 北部方面総監部、各市町及びその他のHPetc）